

「即位の礼・大嘗祭」強行に抗議する声明

「天皇代替わり」に伴う一連の儀式に対して、特に 10/22 の「即位の礼」、11/14～15 の「大嘗祭（だいじょうさい）」について、私たちは政府に対し、下記の理由で強く抗議の意を表明する。

これらは、既に、前回の「即位の礼・大嘗祭」違憲訴訟大阪高裁判決において「政教分離」違反、「国民主権」違反等が指摘されていたにもかかわらず、政府は、殆ど議論もせず「前例踏襲」で強行した。

「即位の礼」の中心儀式「即位礼正殿の儀」は、「天孫降臨」神話に由来する「高御座（たかみくら）」に天皇が立ち、国民の代表である三権の長を見下ろして、即位を「内外に宣明」した後、首相が低い床から天皇を仰ぎ「寿詞（よごと）」を述べ、「ご即位を祝し、天皇陛下万歳」と発声、出席者が万歳三唱をする形で行われた。寿詞の服属儀式性も指摘されている。「万歳」という言葉も、かつて天皇崇拝や軍国主義を進めるための方策だった。これらは政教分離原則・信教の自由・平和主義・国民主権に反する。恩赦も国民主権にそぐわず、天皇礼賛につながる。政府が、当日を「祝日」としたこと自体、更に各府省庁の日の丸掲揚のみならず、自治体や学校、会社等にも掲揚協力の要請をしたことは「祝意」の強要につながる。前例踏襲としながら、前回と異なり、高御座の開帳まで天皇の姿が参列者の目に触れないように演出したのは、天皇の神秘化・権威化をもたらしかねない。

「大嘗祭」は皇室神道儀式であることが明白なため、政府も国事行為とはできず、「宗教儀式としての性格を有するが公的性格がある」として、27 億円もの国費を支出して行った。「大嘗祭」の中核儀式「大嘗宮の儀」は「秘事」とされ隠されているが、戦前『大礼本義』で、新天皇は大嘗祭を通して「皇祖の霊徳を肉体的にお受けになり」神になると説明され、その後、学校では「大神と天皇が御一体におなりあそばす御神事であって、わが大日本が神の国であることを明らかにするもの」（『大嘗祭の御義』1943 年「初等科修身四」）と教えられていた。即ち、「現人神（アラヒトガミ）」としての権威を高めることで、国民に対する支配力を強化する狙いがあった。悠紀田・主基田からの神饌には服属儀礼性がある。このような大嘗祭の強行は、公務員の関与を含め、政教分離原則違反、信教の自由の侵害、国民主権違反であると言わざるを得ない。約 16 億円もかけて設営された大嘗宮は、一部を「一般公開」後、取り壊される。大嘗祭とあわせ税金の浪費でゆるされることではない。

「信教の自由・政教分離」は、全ての人権や武力や権力によらない平和の基である。政教分離・信教の自由等が、伝統文化、社会的儀礼、習俗等の名の下に、言葉巧みに侵犯される時、他の諸々の人権も侵され、平和も壊されていく。イエス・キリストの「平和をつくり出す人は幸いである」との教えに生きる教会、中でも「信教の自由・政教分離」を信仰的特長としてきたバプテストとして、私たちはこの度の「即位の礼・大嘗祭」に強く抗議し、更に今後も天皇制そのものを問い続けていく。

2019年12月8日

日本バプテスト連盟靖国神社問題特別委員会